

伝統的建造物群保存地区 「美々津」

平成27年2月21日 しまね木造塾視察研修
真井洋子



宮崎県中央沿岸部に広がる宮崎平野の最北端、日向灘に注ぐ耳川の河口に位置する美々津は、江戸時代末期から大正時代にかけて廻船業で栄えた港町です。

美々津は、古来神武天皇の船出した港としても知られています。

瀬戸内や近畿地方の玄関口として大いに賑わい、「美々津千軒」と呼ば

れた港町で、白壁土蔵の町並みが残っています。昔から海の交易の拠点として歴史を刻み、当時の文化的な遺産を大切にしたい町づくりが行われています。

昭和に入ると鉄道をはじめとする陸上交通の発達により廻船業は衰退しましたが、美々津の町には今もなお当時の町割が良好に残されており、通りに沿って江戸時代末期から明治時代にかけて建てられた町家が軒を連ねています。

美々津の町家の特徴は、通りに面して「付け庇」があるため、町並みに統一感があります。

近畿の町家と同様「通り庭」と呼ばれる土間を通し、それに沿って表側から「ミセ」「中の間」「座敷」といった部屋を一行または二列に並べています。

「なかの間」が吹き抜けになっており、どの部屋にも光が通り、風の流れが流れています。

廻船問屋らしく二階には隠し部屋があり、面白い造りになっています。

仕切りに格子戸をうまく使い、外と内との結界となっていますが、結界を作りながらも常に外が内部の延長のようにみえる。





他にも軒下の「マツラ」と「バンコ」が挙げられる。

「マツラ」は軒を支える持ち送りのことですが、美々津においてマツラはその家の象徴とされ、競うように大きく、立派に飾られている。

「バンコ」は折り畳み式の床机である。通り端の社交場として利用されていて、雨の日には跳ね上げておくことで簡易の雨除けになるようです。

「ツキヌケ」と呼ばれる小路は、明治時代以降に成立した町並みで比較的規模の小さな住宅が散在しています。

角に共同井戸があり、建物の壁面は石積みの上に漆喰を塗り、町全体の耐火壁の役割をも持たせています。



訪れてみて思うのは、

補助金制度もあり保存活動も進んでいる。

このままの美々津を残してほしいが、町並み保存には後継者高齢化・人口減少等、課題が見える。

今も当時の建物が多く残る町並みは、どこか懐かしい気持ちにさせてくれます。その良さを守りながらの町並み整備をぜひ期待したいと思います。